

「偉くなりたい人は仕える者になろう」

(マルコによる福音書 10:35-45)

今日の使徒書では、主イエスが「大祭司」と言われています。祭司は神と人との間に立つ役割を担います。「人の子は仕えられるためではなく、仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」と言われる主イエスは、地上と天井の間に立てられた十字架の上で神と人との間に立たれ、自らの命を献げ、神と人との関係を結びました。十字架上でこそ、主イエスは大祭司として、栄光をお受けになったのです。

「あなたがたの間で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者はすべての人の僕になりなさい。」と主イエスは言われます。十字架上の主イエスにこそ栄光が表されたように、わたしたちの目には苦難として避けるべきものとして見えるところに栄光が表されます。

洗礼式では、受洗者を神の家族として迎え入れる箇所（祈禱書 P.282）があります。「いま洗礼の恵みにあずかった兄弟よ、わたしたちは、あなたを神の家族のうちに迎え、キリストにあって一体とされたことを感謝します。」と司式者が言うと、会衆がこう唱えます。「十字架につけられたキリストへの信仰を告白し、その復活を宣言し、ともにキリストの祭司職にあずかる者となりましょう。」先述したように、祭司職とは神と人との間に立ち、神と人との関係を結ぶ役割のことです。洗礼を受けた者たちは、この世の人々と神様との間に立ち、皆が神様と結ばれるための役割を担ことが求められているのです。祭司職にあずかるとは、十字架の上で大祭司となられた主イエスのお働きを共に担う、十字架を共に担う、ということです。

しかし、どのようにすればそのような務めを果たせるのでしょうか。それは、「仕える」ことによってです。上昇志向を良しとする、仕えることよりも、仕えられることを良しとするこの世において、仕えることによってです。その姿はこの世の人からは苦難に、避けるべきものとして見えるかもしれない。しかし、その姿によってこそ、人は神を知るのです。その謙虚さを通して、惜しまず捧げる姿を通して、人は神に生かされているものの輝きを見るのです。

そんな立派なこと、わたしにはできないと思われるかもしれませんが、しかし、先週の福音を思い出しましょう。神にできないことはない。わたしたちは神に助けをいただくから、できるのです。神の助けによって、この世で仕えるものとして生きることができるよう。